

2022年6月2日

五木村長 木下 丈二様

五木村議会議長 岡本 精二様

流水型ダムと五木村地域振興に関する請願書

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会
代表 岐部明廣

2008年の川辺川ダム計画中止以来、長きに渡るダム問題の軛から抜け出し、五木村の新しい発展を目指しての取り組みの最中、一昨年豪雨以降に国と蒲島知事の身勝手な都合で再び川辺川ダム計画が持ち上がり、これからの地域づくりの方向性について苦慮されておられるのではないかと察しています。

私たちは2020年7月4日の豪雨によって大きな被害を被りましたが、被災者の多くが「川は何も悪いことはしていない」「ダムによる治水には絶対に反対」と言い続けてきています。

その理由は、今回の災害は本流ではなく支流や水路からの氾濫が先だったこと、亡くなられた50名の方々は例えダムで球磨川本流の水位を下げても救えなかったこと、川から様々な恩恵を受けて暮らしてきた生活への強い愛着、避難の最中に市房ダムを緊急放流寸前の事態に陥り、ダム緊急放流による急な増水で死を覚悟した体験があること、洪水抑制のための荒廃した山林の保護育成が急務であることなどが理由です。

また、蒲島知事は流水型ダムで命と清流を守ると説明していますが、国交省と県が発表した球磨川水系河川整備計画(原案)では、命は「逃げ遅れゼロで対応」と自主避難を促し、清流に関しては「環境影響の最小化を目指す」と流水型ダムが川の生態系を破壊することを前提としています。さらに、計画中の流水型ダムでは、一昨年豪雨の洪水を完全に防ぐ事はできないことを、国交省自身も明言しています。

五木村は、1966年のダム計画発表以来、半世紀以上に渡って国と県に翻弄され続け、人口の急激な流出、地域衰退を余儀なくされてきました。先のダム中止以降は、それまでダム計画に紐付けられていた地域振興のためのハード・ソフト事業の財源措置も約束され、林業、観光、物産、住民福祉、移住定住促進など、まさに全村上げて一丸となり地域振興の取り組みに尽力されて来ました。特に、広大な水没予定地を活用した地域振興の取組みは、宿泊施設や総合運動公園など一部が整備されたものの、まだ計画途上であり、これからの効果的な利活用が期待されているところです。

このような中に、県と国は、五木村の村民感情を無視し、「下流域の住民のため」との大義名分の下に、今ふたたび流水型ダム計画を浮上させて、五木村を先

行きの見えない苦境に陥れようとしています。

私たち流域住民の歴史と文化は、自然豊かな川辺川・球磨川と共に生きて育まれてきました。これからの流域住民の未来も、この歴史と文化の中にあります。

さまざまな課題を抱えた中で村づくりに取り組まれる貴職の業務に深く敬服申し上げますと共に、以下の通り、五木村の地域振興のためにも「流水型ダムを前提としない村づくり」をさらに継続、発展されますよう心から願っております。

- ・ 被災住民も含め下流域住民の大多数は「ダムによる治水」を望んでいない
- ・ 県知事は、流水型ダムについて「命と清流のどちらも守るための唯一の選択」としているが、流水型ダムでは命も清流も、どちらも守ることはできない
- ・ ダムが完成しても、上流にとっても下流にとっても良いことは一つもない
- ・ 一昨年豪雨災害の被害が拡大した大きな要因は、蒲島県知事と国がダム計画を中止して以降の12年間に、「ダムによらない治水対策」をほとんど講じて来なかったことである
- ・ ダム計画がこのまま進めば、先のダム中止以降に全村民と村関係者が尽力してきた、水没予定地でのあらゆる地域振興の取り組みが水泡に帰す。
- ・ これまでの歴史の中でダムが出来て衰退した村や町は沢山あるが、ダムにより栄えた所はない。五木村にとっても豊かな森と川が一番大きな宝である。
- ・ 五木村の発展のためには、広大な水没予定地を活用した取り組みが不可欠
- ・ ダムができれば、五木村最大の地域資源である清流川辺川と、その周辺の景観、生態系、暮らし、魅力が永遠に失われる。
- ・ ダム賛否によりコミュニティが分断され、村の将来がダムに関連付けられ不明瞭になることで行政職員や若い世代の村づくりへの意欲停滞につながる
- ・ 国と県によってダム問題に翻弄され地域衰退を招いた苦難の歴史を、次の世代にまで持ち越すべきではなく、歴史を繰り返させてはならない
- ・ 豪雨災害被害を拡大させた大きな要因は、手入れが行き届かず放置された森林と、効率化により大規模皆伐を推奨する現在の国の林業政策。県は五木村をモデル地域として、森林保水力を極限まで高めた山林を活かした村づくり、流域づくりに取り組むべき

以上

【連絡・問合せ先】

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会
木本雅己